

復活節第3主日礼拝 説教「あなたの口にある主の言葉は真実か」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2017年4月30日

列王記上 17章 17～24節 マタイによる福音書 12章 38～42節

信仰生活において、忘れることのできない人が必ず何人かはいるもので、列王記に登場するこの女性にとって、それがエリヤであったのは間違いありません。ただ、この女性にとってエリヤが忘れ得ぬ人となったのは、春風のような心地良さが理由ではありませんでした。一人息子を失うという経験は、言葉で言い表すことのできない苦しみをこの人にもたせましたのですが、列王記上 17:18 で、御言葉は、その整理できない苦しみを「神の人よ、あなたは私にどんな関わりがあるのでしょうか。あなたを私に罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか」と語らせます。そして、その怒りの矛先をエリヤに突きつけるのですが、そこで、もし、私たちが、エリヤのようにこのような鋭い刃を人から突きつけられたとして、どんな態度を取るのでしょうか。

その人との距離が近ければ、その人の悲しみが自分自身の悲しみとなり、言葉を失うのでしょうか。けれども、その人との距離が、自分の中で遠かったらどうか。恐らく、何もせぬまま、安全なところへと退き、そして、真面目な私たちは、その場を後にしたことへの負い目を感じるのでしょうか。しかし、そこで、自らの力不足をいくら嘆いたところで仕方ありません。「しななかった」ということがすべてであり、ましてや、良きサマリア人の譬えをも知る私たちは、自らが神様に喜ばれていないとの思いにも至るのでしょうか。それゆえ、後悔の念だけがその後に残り続け、普段は蓋をして見ないようにしているも、時々、その蓋が開いて、隠していたはずの正直な自分の姿が顔を覗かせることにもなるのです。私たちの長い人生の中で、そういうことが必ず一つや二つあり、結果、解決のつかない問題に、私たちはどこまでも追いかけて回されることになるのです。

そこで、葬儀の際によく読まれる詩編 23編を思い起こします。詩編 23編 6節には、「命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う」とありますが、そこで言われている恵みと慈しみとは、必ずしも、うれしいばかりではありません。向き合うことを避け、問題を先延ばしにするしかないことが、私たちが生きていく中には、いくつもあって、そして、その

中の多くは、時間が解決してもくれるのでしょうか。けれども、いつまでもその心に棘のように突き刺さって残り続けるものもあるのです。そして、ありがたくなれないことに、神様は、私たちをどこまでも追っかけ回し、棘のように突き刺さった問題を私たちの目の前に置くのです。先ほどの詩編 23編の御言葉は、この有り難くないことを含め、恵みと慈しみと呼んでいるわけですが、ただ、このことは、裏を返せば、私たちが避けたいと思っても、私たちの人生にとっては不要ではないということなのです。つまり、神様の恵みと慈しみを経験する上で大切なものなんだと、そう信じて、大事に抱えておいていいということなのです。

一人息子を失ったこの女性は、エリヤに対し、神の人と、二度、呼びかけているのですが、初めは、エリヤのことを呪い、拒絶し、自らのために絶望したその時でした。そして、次が、「今私は分かりました。・・・」と感謝の思いで一杯になった最後のところでした。ただ、この女性が、この直前でエリヤの奇蹟を経験していることを考えますと、エリヤのことを恨む以前に、「もう一度、奇蹟をお願いします」と素直に頼んでもよかったです。ところが、それをしなかった。それは、以前の経験に頼ることができないほどに、この母親の絶望が深かったからなのでしょうが、しかし、そのような状態にありながら、この母親は、エリヤのことを神の人と呼ぶのです。

エリヤに対する神の人よとの呼びかけは、その絶望の深さと同時に、それに左右されることのない一貫した信仰を言い表しています。従って、私たちは、この母親の矛盾する気持ちと向き合わなければならないのですが、けれども、矛盾と向き合うことを避け、私たちは、一貫的整合性を求めてしまう。破れたものではなく、整ったものを求めてしまう。甦りの事実に感謝するこの母親の気持ちばかりに目が向くのは、そのためなのでしょう。けれども、この母親は、感謝で一杯になったその時にだけ、エリヤのことを神の人と呼んだわけではありません。絶望と喜びと、まったく正反対の心持ちの中で、この女性は、エリヤのことを神の人と呼んでいるのです。

